久留米入城４００年記念
京町校区の見どころ知りどころ
第８回　梅林寺ティーハウス

最終回は、今年7月に新聞やテレビで国の登録文化財になることが報道された「梅林寺ティーハウス」を紹介します。これまで取り上げた歴史遺産に比べて新しく、昭和３３年（１９５８）建設ですが、そのきっかけは有馬豊氏（とようじ）の久留米入城の歴史にも関わりがあります。

話し手の神保さん（久留米市文化財保護課）は、「第２回有馬家墓所」以来、２回目の登場です。この度の文化財登録も担当してきました。

Q. 建設のきっかけは？

（神保）　梅林寺の開山・禹門玄級（うもんげんきゅう）禅師の３５０年遠忌（おんき）記念事業です。禹門玄級は、丹波福知山を治めていた豊氏に招かれ、瑞巌寺（ずいがんじ）を開きました。その瑞巌寺が４００年前、豊氏の久留米入城に伴い現在地に移転、梅林寺に改称されました。

Q. 記念事業とは？

（神保）　昭和３０年当時、梅林寺第１７世玄照東瀏（げんしょうとうりゅう）は、遠忌にかかる境内の修繕等をブリヂストンタイヤ（株）の創業者・石橋正二郎に相談しました。すると正二郎は、戦後の新たな時代を迎えて、変化していく地域社会と梅林寺との間に、新たな接点を築くことの重要性を説きました。

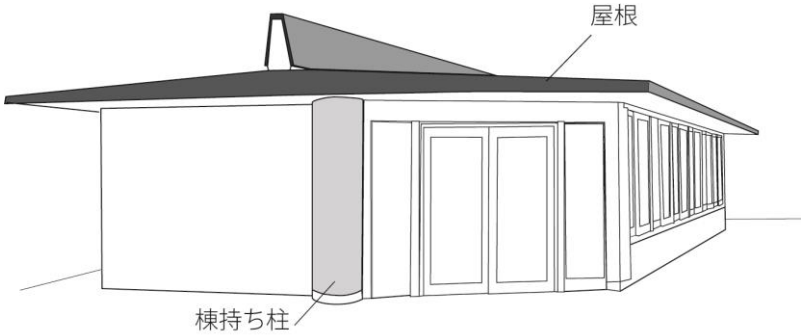
正二郎の構想、玄照東瀏の英断、檀家信徒の理解と協力により、墓地の一部を外苑として整備し、昭和３３年に一般公開しました。以来、四季折々の彩りを楽しみに、多くの人々が訪れています。

Q. ティーハウスとは？

（神保）　外苑整備の一環として昭和３３年に竣工した茶店です。設計は、瀬下町出身の菊竹清訓（きよのり）です。石橋文化センターや九州国立博物館の設計も行いました。県内に残る菊竹の建築作品で、竣工時の姿を留めているものとしては、梅林寺ティーハウスが最古です。

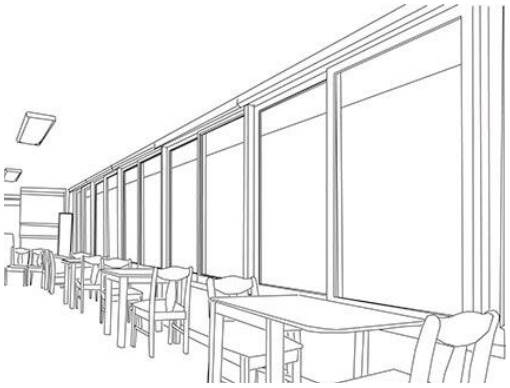
Q. 見どころ知りどころは？

（神保）　柱と壁です。柱は建物の両端中央にそれぞれ1本ずつ棟持ち柱が建てられ、建物中央には壁柱が配置されています。この棟持ち柱と壁柱だけで屋根を支える特殊な構造で、横から見るとヤジロベエのようにバランスを取っています（図１）。梅園側の外壁は、高さを低く抑えた腰壁上にガラス窓を一面にはめ込み、開けた視界を確保しています(図２)。



【図１　梅林寺ティーハウスの屋根を支える仕組み】

そこからの視線は、梅園から筑後川、遠く背振山地まで伸びていきます。眺めを遮る柱や壁を無くすデザインで、室内外が連続する開放的な空間を生み出しているのです。また、建物は筑後川の方を向き、漕ぎ出す船のように見えるのも特徴の一つです。



【図２　開放的な空間を作り出すガラスウォール】

梅林寺は、大名の菩提を弔う霊域であり、九州一の修行道場としても有名ですが、外苑の整備によって地域に開かれ、市民に親しまれる寺院として生まれ変わりました。梅林寺ティーハウスはそのことを象徴する建物として、今も来訪者を迎えてくれます。

（聞き手　市文化財保護課　穴井）